

## 研究プロジェクト成果報告書

上越教育教育大学附属中学校  
校 長 志村 喬  
指導教諭 濁川朋也

### 研究課題

「知識基盤社会を主体的に生き抜く生徒」の育成  
「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒」を育てる教育課程の研究開発

### 研究期間

平成 27 年度～平成 28 年度

### 研究組織（平成 28 年度）

	氏名	所属	職名	備考
運営指導委員	多田 孝志	金沢学院大学	教 授	
	白水 始	東京大学高大接続研究開発センター	教 授	
	釜田 聡	上越教育大学学校教育学系	教 授	
	五十嵐透子	上越教育大学臨床健康教育学系	教 授	
研究スタッフ	志村 喬	上越教育大学附属中学校	校 長	
	長谷川泰山	上越教育大学附属中学校	副校長	
	牧井 創	上越教育大学附属中学校	教 頭	
	中野 博史	上越教育大学附属中学校	主幹教諭	
	濁川 朋也	上越教育大学附属中学校	指導教諭	研究委員
	小出 信也	上越教育大学附属中学校	教 諭	
	岩澤 正顕	上越教育大学附属中学校	教 諭	
	小池 克行	上越教育大学附属中学校	教 諭	
	田口 秀行	上越教育大学附属中学校	教 諭	
	内藤 雅代	上越教育大学附属中学校	教 諭	
	上坂 知大	上越教育大学附属中学校	教 諭	研究委員
	渡邊 孝弘	上越教育大学附属中学校	教 諭	
	鴨井 淳一	上越教育大学附属中学校	教 諭	研究委員
	倉又 佳宏	上越教育大学附属中学校	教 諭	研究委員
	寺田 寛	上越教育大学附属中学校	教 諭	
	樋口 雅樹	上越教育大学附属中学校	教 諭	
	岩野 学	上越教育大学附属中学校	教 諭	研究委員
青柳 潤	上越教育大学附属中学校	教 諭	研究委員	
中村 直美	上越教育大学附属中学校	教 諭		

## 研究成果報告について

平成 27 年度から平成 30 年度までの 4 年間、文部科学大臣の指定により、研究開発学校として、独自の教育課程の認可を受けている。平成 27 年度は準備期間として研究を整備し、平成 28 年度から実証的研究を推し進めている。現研究『「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒」を育てる教育課程の研究開発』は、平成 27 年度に実践した『「知識基盤社会を主体的に生き抜く生徒」の育成』の成果を踏まえたものがある。以下の成果報告では、平成 28 年度における現研究について述べる。

### 1 研究開発課題

高度情報社会，少子高齢社会，グローバル社会の時代に求められる資質・能力（アビリティ）をバランスよく総合的に身に付け、「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒」を育成する教育課程及び指導方法の研究開発

### 2 研究の概要

教科「グローバル人材育成科」を新設し、各教科との両輪で、これからの社会で求められる資質・能力を育成する。育成すべき資質・能力（アビリティ）を 6 つに整理し、それらをその特性により「A 群（情報統合力・代替思考力）」「B 群（企画創造力・主体的実践力）」「C 群（コミュニケーション力・コラボレーション力）」の 3 つの資質・能力群（アビリティ群）に配分した。それぞれの資質・能力をバランスよく総合的に育成するため、「グローバル人材育成科」では、課題討論の時間（主に A 群育成），企画創造の時間（主に B 群育成），グローバルコミュニケーションの時間（主に C 群育成）を分野として設定した。具体的には、①「グローバル人材育成科」と「各教科」の指導内容や指導方法について、②「グローバル人材育成科」における資質・能力（アビリティ）の評価について、③アビリティ育成の素地となる『スキル』の評価について、④研究主題（研究仮説）に対する教育課程の有効性の評価について、⑤教育課程の年間指導計画及び学習指導要領の作成について、当校としての提言を行うこととした。

### 3 研究の目的と仮説等

#### (1) 研究主題

#### 持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒の育成

高度情報社会，少子高齢社会，グローバル社会，成熟社会という言葉に象徴されるように、世界的規模で社会は劇的に変化し続けている。そして、これらの変化に伴い、教育も今、大きな転換期を迎えようとしている。これからの時代で求められる人材、これからの時代を生き抜く力をもった人材とは、いったいどのような人材なのだろうか。

高度情報社会，少子高齢社会，グローバル社会，成熟社会では、以下のような様々な課題が挙げられており、それらへの対応が求められている。

高度情報社会	… 情報格差や情報過多の状況から、正しい情報を取捨選択すること
少子高齢社会	… 科学技術創造立国である日本を支える人材の不足や社会保障負担の増大へ対応するための代案や新たな方策を生み出すこと
グローバル社会	… 外国人観光者の増加や外国人雇用者の増加に伴い、異文化理解力やコミュニケーション力を高めること
成熟社会	… 生活は豊かになり「支え合う集団」から「個人化」思考への変化に伴い、自分の判断で人生を設計し、責任を果たすために行動を起こすこと

また、地球温暖化問題や国際紛争など、その解決のために利害関係を越えた国際協調の必要性が一層高まってきている。そして、グローバル化の進展により世界は隣接化し、各国が独自に抱えてきた問題や、各国に今後新たに生じる可能性のある問題が、取り返しがつかないほどの影響を世界全体に及ぼし、もはや自国だけでは解決できない状況に至るケ

ースが増えている。これまで以上に広く、地域や国内、国外に目を向け、多様な他者と協働しながら、これまでにない新しい発想を生み出したり、社会を築き上げたりしながら、自分自身や社会、世界を正しい方向へと導いて行かなければならない。

私たちは、このような現状に対し、これからの社会に適応するだけでなく、「これからの社会を創り上げる人材」を育成する必要がある、そして様々な変化が起こる時代だからこそ、人としての在り方を重視し、「歩むべき正しい道を自ら切り拓く人材」を育成する必要があると捉えている。

そこで、これからの時代を担う志高き生徒の育成を図るため、表題のとおり研究主題「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒の育成」を設定した。

「持続可能な社会を創造する」こととは、これからの社会に適応するのではなく、地域や世界の実態に目を向け、未来の社会を自ら創り上げることである。「自己を確立できる」こととは、様々な経験を通して、自らを客観的に見つめ、正しく行動できることである。

研究主題で目指す生徒を「グローバル人材」と捉え、この研究主題に迫るため、新設教科「グローバル人材育成科」を創設し、新たな教育課程を編成することとした。これからの社会で求められる資質・能力について、前述の各社会における様々な課題から当校で分析し、さらに文部科学省中央教育審議会や国立教育政策研究所、Microsoft、日本ユネスコ国内委員会の各研究報告書等を基に、【情報統合力】【代替思考力】【企画創造力】【主体的実践力】【コミュニケーション力】【コラボレーション力】の6つに整理した。当校では、これらの6つの資質・能力をアビリティと名付け、研究主題にある「持続可能な社会を創造すること」「自己を確立すること」と「アビリティをあらゆる場面で発揮すること」を同義とした。

**【情報統合力】**

課題や目的に応じて、必要な情報を集め、まとめる力

**【代替思考力】**

課題の問題点や物事の本質を捉え直す力

**【企画創造力】**

周囲の状況や動向を予測しながら、みんなのためになる活動を創り出す力

**【主体的実践力】**

内容や活動を調整しながら率先して行動する力

**【コミュニケーション力】**

情報を受信したり、発信したりしながら、様々な考えや意見を認め合い、人やものとの関係を広げる力

**【コラボレーション力】**

進んで協力し合いながら、互いの目的を達成する力

また、アビリティはE S Dで育成が求められている7つの能力態度「批判的に考える力」「未来像を予測して計画する力」「多面的総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「進んで参加する態度」をすべて包含している。

そして、主としてグローバル人材育成科においてアビリティを育成するとともに、各教科においてもアビリティ育成の視点をもって学習指導を行う教育課程の在り方について実践的研究開発を行うこととした。

## (2) 研究仮説

「グローバル人材育成科」を新設し、各教科と両輪でこれからの社会で求められるアビリティを育成する教育課程を編成することで、「持続可能な社会を創造し、自己を確立できる生徒」を育むことができる

当校は、2016年度から2018年度の3年間、文部科学省研究開発学校の指定を受け、

研究を推し進め、指導内容や指導方法及び研究仮説の検証方法に関し、以下の5つの項目について提言を行う。

- ・「グローバル人材育成科」と「各教科」の指導内容や指導方法について
- ・「グローバル人材育成科」におけるアビリティの評価について
- ・アビリティ育成の素地となる『スキル』の評価について
- ・研究主題（研究仮説）に対する教育課程の有効性の評価について
- ・教育課程の年間指導計画及び学習指導要領の作成について

### (3) 教育課程の特例

各教科の一部、「総合的な学習の時間」を削減して、新教科「グローバル人材育成科」を設置した。

## 4 研究内容

### (1) 教育課程の内容

#### 1) グローバル人材育成科

グローバル人材育成科はグローバル人材の育成の視点として次の3つを重視する。

- ・アビリティ育成の素地となる『スキル』の向上
- ・実践場面を通じたアビリティの育成
- ・E S Dの概念形成

グローバル人材育成科は、「課題討論の時間」「企画創造の時間」「グローバルコミュニケーションの時間」の3つの分野からなる。アビリティをその類似した特性により2つずつにまとめること（アビリティ群）で、生徒もアビリティを意識でき、より効果的に育成できると捉え、3分野に配分した。ただし、配分したアビリティのみを育成するのではなく、主に育成するという捉えである。

グローバル人材育成科	アビリティ	『スキル』	『スキル』の具体
課題討論の時間	情報統合力	情1 情報収集	調べる、記録する、取材する、問題点を把握する
		情2 情報整理	比較する、分類する、分析する、優先順位を付ける
	代替思考力	代1 思考拡散	アイデアを出す、アレンジする、代案を出す
		代2 比較検討	視点を設定する、吟味する
		代3 思考収束	ひとつにまとめる、折り合いを付ける
企画創造の時間	企画創造力	企1 目標設定	ゴールをイメージする、不安要素を明らかにする
		企2 手段構築	役割分担する、日程調整する、計画を立てる
	主体的実践力	主1 渉外調整	外部の人と目標・手段を共有する
		主2 準備試行	リハーサルする、試作する、シミュレーションする
		主3 役割遂行	自分の役割を果たす、進んで行動する
グローバル コミュニケーション の時間	コミュニ ケーション力	コミ1 相互理解	受容する、認め合う、互いの立場で目的を理解する
		コミ2 即応思考	アドリブで対応する、相手の様子に応じて話す、相手を乗せる
		コミ3 情報運用	機器や資料を使いこなす、よりよいプレゼン方法を検討する
		コミ4 礼儀作法	時と場に応じた挨拶や言葉遣いをする、謙虚に相手の話を聞く
	コラボ レーション力	コラ1 協働創造	協力して新しいものを創り上げる
		コラ2 互恵行動	互いの利益を生むために行動する

E S Dの概念形成については、学習事項（特に持続可能性に関する知識・理解に関する内容）や学習活動と関連するアビリティ育成の素地となる『スキル』（特に持続可能性に関する能力・態度に関する内容）として位置付けた。

#### ①課題討論の時間

課題討論の時間は、主として【情報統合力】【代替思考力】を育成する場である。「企画創造の時間」「グローバルコミュニケーションの時間」における活動を振り返り、課題の改善に向けて具体的方策を練り上げる。

また現代、近未来における喫緊の課題を話題とし、実践的討論の技能や討論に臨む姿勢や態度の向上を目指して活動に取り組む。

## ②企画創造の時間

企画創造の時間は、主として【企画創造力】【主体的実践力】を育成する場である。自分たちの日常活動や生徒会活動、「グローバルコミュニケーションの時間」の活動について企画立案し、活動に向けた準備や試行を行う。

また、活動を創り上げていく喜び、主体的に取り組むことの大切さについて学んでいく。

## ③グローバルコミュニケーションの時間

「グローバルコミュニケーションの時間」は、主として【コミュニケーション力】【コラボレーション力】を育成する場である。また、「グローバルコミュニケーションの時間」は、アビリティ育成の素地となる『スキル』を向上する場であり、アビリティを高める場である。様々な体験活動を通して、多様な他者と関わりを広げ、これからの社会の在り方、自分の在るべき姿について考えを深めていく。そして、国語や英語などの言語活動やグループワークによる協働的な学習を行い、実践的に【コミュニケーション力】や【コラボレーション力】を高める活動に取り組む。

また、「グローバルコミュニケーションの時間」において、アビリティ育成の素地となる『スキル』の向上に取り組むのは、多様な他者とコミュニケーション活動やコラボレーション活動を行うことで効果的な『スキル』の向上につながると考えたからである。

グローバル人材育成科における評価は、生徒の活動の様子、階層型ルーブリックを活用した生徒の自己評価、ポートフォリオによる評価を行う。階層型ルーブリックでは、生徒に「A」の姿で満足させるのではなく、「A」の上をいく「S」の姿を考えさせ、その姿に迫れたかどうかの振り返りをさせる。また、ポートフォリオは、デジタル化して蓄積していく。

## 2) 各教科

各教科は学習事項の習得とグローバル人材の視点として次の2つについて重視する。

- ・学習活動に関連したアビリティ育成の素地となる『スキル』の向上
- ・E S Dの概念形成

各教科では、学習事項習得のための各教科の学習活動が、アビリティ育成の素地となる『スキル』とどのように関連しているのかを明確にし、その『スキル』の向上を意識して学習指導に当たる。教師が『スキル』の向上を意識することで、これまで以上に多くの生徒が各教科の目標や単元・題材のねらいの達成に迫ることができると考える。ただし、各教科において、学習活動と全ての『スキル』と関連させるというものではなく、その単元題材で最も学習効果が期待される活動に焦点を当てることとする。

また、年間指導計画の学習活動に『スキル』を位置付けていく。評価については、国語は5観点、その他教科は4観点で行う。本研究において道徳を各教科に位置付けているが、観点別評価の設定と本研究における評価の趣旨が異なるため、評価を行わないものとした。E S Dの概念形成については、学習事項（特に持続可能性に関する知識・理解）や学習活動と関連するアビリティ育成の素地となる『スキル』（特に持続可能性に関する能力・態度）として位置付けた。

## 3) その他

- ・グローバル人材育成科や各教科以外にも、希望する生徒にブリティッシュヒルズ英語キャンプの機会を設定した。
- ・生徒一人一人がタブレット端末を持参し、学習用として活用している。校内のネットワークを通じて、生徒が互いに情報を共有したり、共通資料を配付したりするなど、情報運用に関わって使用している。

## 5 実践の結果

以下に、研究の結果及び分析を示す。データテーブルについては、補足資料1～5を参照  
(1) パフォーマンステストAの結果及び分析

### 1) 考察

#### ①『スキル』出現頻度＜全体＞

- ・全体の平均値では、どの学年でも、数値の上昇が見られるが、1・2年生の伸びが大きい。2学期の様々な学習活動やそれまでの蓄積が、複数の『スキル』に気付かせることにつながっていると考える。
- ・[情報収集]について、1年生に大きな伸びが見られる。一人1台のタブレット端末を活用した調べ学習を中心に、よりよい方法を学んでいる。どの学年も高次で推移をしているが、[情報整理]についての意識はまだ低い。集めた情報をどのように活用すべきか、を視点に、その重要性に気付かせながら授業改善を進める。
- ・[思考拡散]について、2年生に大きな伸びが見られる。ミニホワイトボードを活用したアイデアを広げる場の設定や、思考ツールの活用が大きい。現在は教師が設定しているこうしたツールを生徒自身が選択できるようにしていく。
- ・[手段構築]では、1・2年生で大きな伸びが見られる。1年生では、『スキル』向上コンテンツ「本町商店街お手伝いプロジェクト」において、店主から出された課題を解決するために、何度も話し合いを重ね、提案する姿が見られた。また、2年生では同じく『スキル』向上コンテンツ「文化祭」において、3年生のサポートをしながら、よりよい活動にできるように進んで意見を述べる姿が見られた。こうした経験が、[手段構築]への意識に繋がっていると考える。一方で、3年生は[渉外調整]とともに、有意に数値が減少している。「文化祭」の準備活動では、これらの『スキル』の高まっている姿が多く見られたことから、数値が生徒の実際の変容を示しているとは考えにくく、採点者が異なることによる「基準」の差異があったのではないかと推測している。
- ・[準備試行]では、全学年で大きな伸びが見られた。『スキル』向上コンテンツ「本町商店街お手伝いプロジェクト」「文化祭」などで、試作やリハーサルの経験を積み、その大切さや効果を実感したことも、その要因と考えている。
- ・[情報運用]では、特に3年生で大きな伸びが見られた。「文化祭」の企画を下級生に提案したり、準備の様子取材しながらメディアで発信したり、といった経験を通して、より効果的なプレゼンテーションの方法を進んで検討する姿が見られた。

#### ②『スキル』出現頻度＜個人＞

- ・各学年の傾向は、＜全体＞とほぼ一致しているが、【コミュニケーション力】に関する『スキル』の出現は少ない。筆答ということもあるが、こうした『スキル』への意識が浅いことが推測できる。
- ・数値はあくまで平均であり、テストでは出現『スキル』がゼロという生徒も見られた。
- ・出現頻度が高いのは[情報収集][手段構築]などであるが、他の『スキル』の学習経験がないということではなく、活動の中で自覚できていなかったことが原因と考える。

### 2) 次年度への検討事項

- ・自分にとって使い慣れた『スキル』だけで満足するのではなく、自分が今まで意識しなかったような『スキル』にも目を向けさせるための手立てを開発する。また、そうした経験を積みながら、『スキル』を選択して使おうとする姿を目指す。
- ・パフォーマンステストの評価方法について、差ができるだけ生まれないように職員研修を進める。評価の根拠となる『スキル』の具体についても必要に応じて改訂を進める。

## (2) 生徒アンケートの結果及び考察

### 1) 考察

- ・「問5：課題に応じて、必要な情報を集めることができる」「問6：集めた情報を整理することができる」では、各学年とも高得点であり、2，3年生では変化は見られなかった。1年生では上昇が見られたが、その要因として、『スキル』向上トレーニングにおいて、タブレット端末での情報収集の仕方について、教師から適切な指示やサポートを受けたり、収集した情報のラベリングの方法や蓄積の方法を学んだりしたことが大きいと考えられる。
- ・「問7：課題について話し合うときに、自ら新しいアイデアを出すことができる」では、1年生で数値の上昇が見られた。グローバル人材育成科では、1年生のうちに話し合いについての『スキル』向上トレーニングを多く設定しており、その中で生徒は話し合いの方法だけでなく、どうしたらよりよい話し合いになるのかという取り組み方についても学習している。そうしたことから、進んで提案する姿を自覚するようになったと考えられる。
- ・「問12：活動を進める際に、協力してほしい外部の人と、活動や予定を調整することができる」では、1年生で大きな上昇が見られた。9月から、『スキル』向上コンテンツ「本町商店街お手伝いプロジェクト」に取り組む中で、生徒は直接店主らと連絡をとり、活動内容の交渉や日程の調整を行った。そうした経験が要因として考えられる。
- ・「問17：発表を行うときに、情報機器を使いこなしてよりよい発表を作ることができる」では、1年生で上昇が見られた。一人1台のタブレット端末を所有しているということもあり、他者に依存せず、自ら発表資料を分かりやすく構成したり、学級内で発表したりという経験を2学期以降、多く積み重ねることができた。
- ・「問19：同じ課題を追究する仲間以外とも関わって、これまでにない、新しいものを創り出すことができる」「問20：同じ課題を追究する仲間以外とも関わって、互いにメリットのある良好な関係を築き、活動をすることができる」では、3年生で上昇が見られた。これは、『スキル』向上コンテンツ「文化祭」への取組によるものと考えられる。問19では大きな上昇となっているが、前年度まで行われていなかった外部への公開という形での文化祭の運営について、生徒がその活動や成果に手応えを感じたからであると思われる。また、他学年のクラスの生徒や校外の事業所、商店などにも関わりをもちながら活動を進めたことが、問20の成果につながっていると考えられる。
- ・2年生では数値上の大きな上昇が見られなかった。2学期の『スキル』向上コンテンツ「文化祭」への取組が、3年生との協働であるということもあり、主体的に取り組んでいるという実感を得にくく、こうした質問項目に対する回答に反映されなかったのではないかと考える。

### 2) 次年度への検討事項

- ・こうした質問項目がどういった場面でのことを問うているのかをうまく捉え切れていない生徒も見られる。『スキル』と併せて、自分が期待されている姿を自覚させるための手立てを講じていく。
- ・2年生では、学年後半に「修学旅行」を控えており、2学期に取り組む『スキル』向上コンテンツへの時数は余り多くない。また、「文化祭」自体も3年生のサポートを行うことが中心となっている。こうしたことが2学期の成長の実感を得にくいことの要因になっている。コンテンツの配置時期や時数、内容について改善を図っていく。

### (3) 保護者アンケートの結果及び考察

#### 1) 考察

- ・「問1：各教科の学習に加え、「情報統合力」「代替思考力」のように、これからの社会で求められる資質・能力を育成することは大切だと思う」「問2：これからの社会で求められている資質・能力を育成する「グローバル人材育成科」のような教科は必要だと思う」について、とても高い割合で肯定的評価を得ている。また、「問3：子どもたちの学力や資質・能力の育成のために、これまでの教育課程と比べ、年間授業時数を増やしたことはよいと考える」でも、まだ本教育課程の実施初年度ではあるが、8割以上で肯定的評価を得ている。しかしながら、「⑤はっきりハイ」と回答しているのは全体の5～6割程度にとどまっており、まだ「確信」を持っていない保護者もいることが推測できる。
- ・「問8：お子様は、物事に取り組む際は、計画を立て、見通しをもって行動している」「問9：お子様は、家庭での自らの役割に、進んで取り組んでいる」では、「③どちらとも言えない」と回答する保護者が3割となり、肯定的評価が過半数を下回った。学校生活の中での活動を見る限りでは、こうした項目を達成するのに十分な能力があると認められるが、生徒の中でその意識や自覚が低いことが見て取れる。
- ・「問12：お子様は、積極的に地域の方と関わるなど、家族以外の人の役に立っている」では、「③どちらとも言えない」が4割を占め、肯定的評価は3割にとどまった。『スキル』向上コンテンツ「本町商店街お手伝いプロジェクト」や「文化祭」で得られた経験が、生徒からどのように保護者に伝わっているのかを今後も注視する。

#### 2) 次年度への検討事項

- ・当校の教育課程や全体の研究内容については、おおむね肯定的評価を得ている一方で、それらが生徒を良い方向に確実に変化させているのかどうかということについて、保護者の実感が伴っていない部分も見える。学習活動だけでなく、生徒の変容についても、積極的に情報発信していく。また、家庭は「学校で学んだ『スキル』向上の復習・発展の場」であることを生徒に自覚させ、より具体的な姿が保護者に伝わるように支援する。
- ・校外の人と関わったという事実やその経験から生徒が何を学んだか、そうしたコミュニケーションが家庭でも行われることを期待する。デジタルポートフォリオの可視化や情報発信の工夫など、改善の手立てを講じていく。

### (4) ルーブリックを活用した評価

#### 1) 考察

- ・A目標で満足せずに、より高次のS目標を設定することで、ステージ全体の学びの内容や向上を目指す『スキル』への関心が深まっている様子が見られた。
- ・「より高次」という幅の広い文言が生徒の発想の自由度を高めていた反面、そこに気付けずに単純に量的な面を増やすだけ、という生徒も見られた。
- ・S目標の内容は「いつでも、何度でも追加・修正してもよい」としていたが、逆にそのタイミングがつかめずに困惑している生徒も見られた。
- ・実践を進めながら、生徒の中で自分なりの「よりよい目標設定の方法」が定まってくるように見えた。特に3年生ではその傾向がはっきりと見られた。

#### 2) 次年度への検討事項

- ・S目標の設定については、他者と文言やその意図を共有することで、より内容の高まりが期待できる。また、複数年の実践を重ねることでモデルの蓄積や提示も可能になるが、生徒の創意工夫の意欲が低下しないように配慮しなくてはならない。
- ・学習活動の内容にもよるが、最低でも週に1回は自分のS目標を確認し、必要に応じて見直しをするように呼びかけを行う。
- ・次年度は、デジタルポートフォリオとの併用がしやすいように、デジタルで書き込みを行ったり、複数ファイルを追加・更新したりしながら、運用を進める。



# 補 足 資 料 1

# パフォーマンステストA (7月, 12月)

## ◆ 『スキル』出現頻度<全体>

= 1回以上それぞれの『スキル』が現れた生徒の割合

スキル	1年生				2年生				3年生			
	平均			検定	平均			検定	平均			検定
	7月	12月	比較増減		7月	12月	比較増減		7月	12月	比較増減	
1 情報収集	52.9%	70.7%	17.9%	**	86.1%	88.5%	2.5%		78.9%	80.0%	1.1%	
2 情報整理	30.1%	43.1%	13.0%	*	34.4%	40.2%	5.7%		40.0%	37.8%	-2.2%	
3 思考拡散	35.0%	43.1%	8.1%		26.2%	53.3%	27.1%	**	41.1%	46.7%	5.6%	
4 比較検討	28.5%	32.5%	4.1%		23.0%	32.8%	9.8%		26.7%	32.2%	5.6%	
5 思考収束	29.3%	35.0%	5.7%		35.3%	48.4%	13.1%	*	38.9%	37.8%	-1.1%	
6 目標設定	6.5%	8.9%	2.4%		21.3%	31.2%	9.8%		36.7%	46.7%	10.0%	
7 手段構築	26.0%	59.4%	33.3%	**	49.2%	76.2%	27.1%	**	73.3%	61.1%	-12.2%	*
8 渉外調整	34.2%	35.8%	1.6%		14.8%	18.0%	3.3%		40.0%	25.6%	-14.4%	*
9 準備試行	23.6%	35.8%	12.2%	*	44.3%	68.0%	23.8%	**	43.3%	63.3%	20.0%	**
10 役割遂行	4.1%	9.8%	5.7%		9.8%	18.0%	8.2%	*	7.8%	2.2%	-5.6%	
11 相互理解	0.8%	4.1%	3.3%		5.7%	9.8%	4.1%		6.7%	8.9%	2.2%	
12 即応思考	4.9%	1.6%	-3.3%		5.7%	6.6%	0.8%		10.0%	3.3%	-6.7%	*
13 情報運用	32.5%	43.1%	10.6%	*	54.9%	49.2%	-5.7%		37.8%	63.3%	25.6%	**
14 礼儀作法	1.6%	7.3%	5.7%	*	25.4%	13.1%	-12.3%	*	16.7%	10.0%	-6.7%	
15 協働創造	0.0%	0.0%	0.0%		2.5%	1.6%	-0.8%		2.2%	2.2%	0.0%	
16 互惠行動	0.0%	0.0%	0.0%		0.0%	0.0%	0.0%		1.1%	2.2%	1.1%	
全体	19.4%	26.9%	7.5%	**	27.4%	34.7%	7.3%	**	31.3%	32.7%	1.4%	**

## ◆ 『スキル』出現頻度<個人>

= 個人内でそれぞれの『スキル』が現れた平均回数

スキル	1年生				2年生				3年生			
	平均 (回)			検定	平均 (回)			検定	平均 (回)			検定
	7月	12月	比較増減		7月	12月	比較増減		7月	12月	比較増減	
1 情報収集	1.28	1.69	0.41	**	1.91	1.76	-0.15		1.66	1.34	-0.31	*
2 情報整理	0.46	0.61	0.15	+	0.46	0.50	0.04		0.52	0.50	-0.02	
3 思考拡散	0.57	0.74	0.17		0.33	0.65	0.32	**	0.54	0.62	0.08	
4 比較検討	0.41	0.51	0.10		0.29	0.36	0.07		0.30	0.36	0.06	
5 思考収束	0.42	0.44	0.02		0.44	0.61	0.17	*	0.49	0.49	0.00	
6 目標設定	0.08	0.11	0.03		0.24	0.36	0.12	*	0.42	0.53	0.11	
7 手段構築	0.37	1.10	0.72	**	0.80	1.33	0.52	*	1.21	0.88	-0.33	**
8 渉外調整	0.47	0.50	0.03		0.16	0.20	0.04		0.49	0.29	-0.20	*
9 準備試行	0.33	0.48	0.15	+	0.59	0.94	0.35	**	0.51	0.88	0.37	**
10 役割遂行	0.04	0.12	0.08	+	0.11	0.20	0.08	+	0.08	0.02	-0.06	+
11 相互理解	0.01	0.04	0.03		0.07	0.10	0.03		0.10	0.10	0.00	+
12 即応思考	0.05	0.02	-0.03		0.06	0.07	0.01		0.12	0.04	-0.08	
13 情報運用	0.41	0.53	0.11	+	0.74	0.57	-0.16	+	0.51	0.87	0.36	**
14 礼儀作法	0.02	0.09	0.07	*	0.31	0.15	-0.16	**	0.27	0.12	-0.14	
15 協働創造	0.00	0.00	0.00		0.02	0.02	-0.01		0.02	0.02	0.00	
16 互惠行動	0.00	0.00	0.00		0.00	0.00	0.00		0.01	0.02	0.01	
全体	0.31	0.44	0.13	**	0.41	0.49	0.08	**	0.45	0.44	-0.01	**

空欄 : n.s., + : p<0.1, \* : p<0.05, \*\* : p<0.01

# 補 足 資 料 2

# 1年生1回目

問

以下の課題に、学校の授業6時間で取り組みます。条件は下に書いてある通りです。  
 あなたはその6時間で、どのように活動しますか。実際に活動する場面を想像し、活動計画を**箇条書き**で**具体的に**書いてください。

条件

- ・誰とグループをつくってもよい。 ・何を使ってもよい。
- ・どこと連絡をとってもよい。 ・どこに出かけてもよい
- ・発表には、何を使ってもよい。 ・6時間目に、5分以内で成果を発表しなければならない。

附属中学校が修学旅行でお世話になっている上越市の旅行者に、長野市内の小学校から次のような依頼が入りました。

「今まで、修学旅行は佐渡に行っていたんだけど、もし上越地域で魅力的な修学旅行ができれば、移動時間の短縮になり、多くの場所を回れるので、そうしたいと考えているんです。何かプランを作ってもらえないですか？」

困った旅行者の方から、小学生に年齢に近い附属中生の意見を是非聞きたいという連絡が入りました。旅行者の参考になるような上越地域を巡る修学旅行の案を作り、5分間で発表してください。

- ・まず男女のグループをつくる。(男子の意見、女子の意見はそれぞれ違う視点があるから。) (3-2)
- ・グループで上越の楽しめる所などをiPad、雑誌、本などを使って調べる。(小学生が楽しめそうな場所を3つほど出す)
- ・市役所など上越の観光などを知っている場所に電話をいど入り所が楽しめるか、をきく。 (1-1)
- ・そのあと、外に出て上越市を歩いて自分たちでどこかたのしめるかをきいてみる。 (1-1)
- ・3つのことをしててたところの中から自分たちで本当に楽しめるか、

自分たちが行ったら思い出に残るかを考えて場所

の仮案をたずねる。 (2-2)

仮案の場所に自分たちで行き、小学生になりきってもう一度

かく人にしたり、お店の人とかかわり、楽しめるところかなどをきいてみる。 (4-1)

その中から決定の場所をきめてお店の人からきいたことをさんこうにたよるかを決める。 (1-2)

時間を決めるときは、どうしたら活動時間が短くとれる

かを考えながら時間設定をし、プランを完成させる。 (2-3)

その後、グループで5分以内でiPadを使い、どうしたら

短い時間で私たちのプランの魅力を分かりやすく伝えるかを考える。その結果 (5-3)

場所の魅力をしっかりとiPad

に説明できるようにする。 (5-2)

4人それぞれに役割をうけて協力し

ながら5分間の発表を考えて用紙も

もして完成になる。 (4-2)

情	1/2	情報収集	1	1
	1/2	情報整理	1	1
代	1/2	思考拡散	1	1
	1/3	比較検討	1	1
	1/3	思考収束	1	1
企	1/2	目標設定	1	1
	1/2	手段構築	1	1
主	1/2	渉外調整	1	1
	1/3	準備試行	1	1
	1/3	役割遂行	1	1
コ		相互理解	1	1
ミ		即応思考	1	1
ニ	2/1	情報運用	1	1
	1/4	礼儀作法	1	1
コ		協働創造	1	1
ラ	1/2	互恵行動	1	1
合計	8/9		9/13	1/6

# 1年生2回目

附属中学校が修学旅行でお世話になっている上越市の旅行者に、長野市内の小学校から次のような依頼が入りました。

「今まで、修学旅行は佐渡に行ってただけど、もし上越地域で魅力的な修学旅行ができれば、移動時間の短縮になり、多くの場所を回れるので、そうしたいと考えているんです。何かプランを作ってもらえないですか？」

困った旅行者の方から、小学生に年齢が近い附属中生の意見を是非聞きたいという連絡が入りました。旅行者の参考になるような上越地域を巡る修学旅行の案を作り、5分間で発表してください。

## 問い

上の課題に、学校の授業6時間（1日）で取り組みます。条件は下に書いてある通りです。

あなたはその6時間で、**どのように活動しますか。**実際に活動する場面を想像し、あなたの**活動計画を簡易書きで具体的に**書いてください。活動は実現可能なものとします。提案・発表およびプレゼンの内容は詳細に記述する必要はありません。

### 【条件】

- 誰とグループをつくってもよい
- どこと連絡をとってもよい
- どこに出かけてもよい
- 何を使ってもよい
- 発表には、何を使ってもよい
- 6時間目に、5分以内で成果を発表しなければならない。

まず、男女2:2のグループをつくる。 (1-1)

市役所にねんらくをしておすすめの旅場所をきく

同じクラスの人に頼みにいときどこにいくかのアンケート取材をする (1-1)

旅行雑誌をみてどこがおすすめか、どうい場所があるか、どういプランがいいかをみる (1-1)

iPadでおすすめの場所をしらべる (1-1)

そこからこうきを何個か出す (1-1)

仮のプランをつくる (1-2)

仮のプランの場所について、小学生やリョウにきた人の気持ちにたずねる (1-1)

学校にもどってどういったかきあしめる (1-2)

必要な場合また雑誌やiPadをつかってしらべてみる (1-)

また仮のプランをつくる (3-2)

次はプランによって場所について、旅行者の気持ちにおいて体験してはる (1-1)

学校にもどって話し合う (1-1)

決定のプランをつくる (3-2)

そこで仮にをして、なにをやるかなどくわしいことをまかく決める

一回ごとにプランをそのままいき、しかんちやせいかいなどをみる (4-2)

iPadでプランをつくり、しんをいれたいからプランをつくる (5-4)

プレゼンするときによりつたゆるようにしんをいれたい (5-3)

そこであれたらプランの発表

それかりややく大きめにえてみる

※ここへは記入しないでください

情	2/2	情報収集	6-正
		情報整理	2-7
代	2/3	思考拡散	
		比較検討	1-
企	1/2	思考収束	1-
		目標設定	
主	1/3	手段構築	1-
		渉外調整	
ミ	1/4	準備試行	3-下
		役割遂行	
ミ	1/4	相互理解	
		即応思考	
ミ	1/4	情報運用	1-
		礼儀作法	
ミ	1/2	協働創造	
		互惠行動	
合計		7	16

# 2年生1回目

問

以下の課題に、学校の授業6時間で行います。条件は下に書いてある通りです。  
 あなたはその6時間で、どのように活動しますか。実際に活動する場面を想像し、活動計画を箇条書きで具体的に書いてください。

条件

- 誰とグループをつくってもよい。
- 何を使ってもよい。
- どこと連絡をとってもよい。
- どこに出かけてもよい
- 発表には、何を使ってもよい。
- 6時間目に、5分以内で成果を発表しなければならない。

春休みの課題として、上越市が主催する「防災パンフレットコンテスト」に応募することになりました。市民の防災意識を高めるために、市が主催したコンテストです。応募内容は、市が作る防災パンフレットの表紙に用いられる「キャッチコピー」と自然災害への備えをまとめた「パンフレット内容」の二つです。採用された場合、あなたの作ったキャッチコピーと防災の内容が市内のすべての家庭に配られます。また、副賞として、県外への防災視察ツアーに参加できます。提案するキャッチコピーと内容を考えて、5分間で発表してください。

時間の流れ

- 1時間目 ... 7-70編成, どんな内容にするか案を出し合い決定
- 2時間目 ... 7-70でどんなものにするか案を出し合い決定
- 3時間目 ... (連絡したい所があれば連絡していい)
- 4時間目 ... 7-70を作成する → 中間発表 4-2
- 5時間目 ... (行きたい所があれば行きたいでもいい)
- 6時間目 ... 最終チェック, 発表

①

○ 7-70編成はくじ引きで行う(男女一緒) [4人7-70 男2 女2] → 好きな同士だとおんなは納得しない, 平等じゃなくなる

特に好... 何かになる?! 7-70のおんなと男を深めためらうとグループを行う

何のためにこの活動を行うのか 止む者なし。 「おんなはいいから」とかいいな... (3-1)

② ○ 内容を出し合い 7-70シート 使用 1人1本もって いせいに書く  
 → 個人で考えてから7-70でホワイトボードを使って出し合い  
 ※ 二で速慮してはダメ, 自分が出し意見をしっかり言う (2-1)  
 ☆ 他から何を言われるかはわからなくし怖い? とかはみんなは心配。二は、三とかもしたいから言うこと。 (4-3)

出し合のらその中で3-5に内容をいざ、 ↓ 具体的にしたい

③  
④  
⑤

○ キャッチコピー、パンフレット内容作成 ⇒ 質問しても答えられるように準備して作成する。  
 → 各7-70でやり方を任せる, ホワイトボードに書いたものを元に考える。  
 ※ 連絡したい所があれば連絡する, 実際行きたいところは行く (1-1)  
 ☆ この時iPadなどは紙などに書いてまとめる。 (手始めは指定はない。)  
 → みんなが一緒に見れるようにする, 1人1つの画面をみていると他の人がわからなくなる。 (5-3)

授業はいい。おんなはいい。おんなはいい。

④ ○ 中間発表を行う 4-3  
 → くじ引きで7-70を決めて中間発表をする

⑤

※ アドバイス, 意見を言い合う (2-2) (4-2)  
 質問があればいい  
 ☆ 発表会  
 最終改善 最終チェック  
 「おんなはいい!」 「知らなかった!」 などと新しい意見を探す。聞いて思ったことを言うこと。 (6)  
 (5-2)

情	1/12	情報収集	—
		情報整理	—
代	3/13	思考拡散	—
		比較検討	—
		思考収束	—
企	2/12	目標設定	—
		手段構築	—
主		渉外調整	—
		準備実行	T
		役割遂行	T
コ	2/13	相互理解	—
		即応思考	—
ニ	3/14	情報運用	—
		礼儀作法	—
コ	0/12	協働創造	—
		互惠行動	—
合計	11	116	



# 2年生2回目

春休みの課題として、上越市が主催する「防災パンフレットコンテスト」に応募することになりました。市民の防災意識を高めるために、市が主催したコンテストです。応募内容は、市が作る防災パンフレットの表紙に用いられる「キャッチコピー」と自然災害への備えをまとめた「パンフレット内容」の二つです。

採用された場合、あなたの作ったキャッチコピーと防災の内容が市内のすべての家庭に配られます。また、副賞として、県外への防災視察ツアーに参加できます。提案するキャッチコピーと内容を考え、5分間で発表してください。

## 問い

上の課題に、学校の授業6時間（1日）で取り組みます。条件は下に書いてある通りです。あなたはその6時間で、**どのように活動しますか。**実際に活動する場面を想像し、あなたの**活動計画を簡易書まで具体的に**書いてください。活動は実現可能なものとします。**提案・発表およびプレゼンの内容は詳細に記述する必要はありません。**

### 【条件】

- 誰とグループをつくってもよい
- どこと連絡をとってもよい
- どこに出かけてもよい
- 何を使ってもよい
- 発表には、何を使ってもよい
- 6時間目に、5分以内で成果を発表しなければならない。

(1時間目)
・防災について学び、知る → 動画、webサイトなどを活用して見る
・防災についてアイデアをひらき出す → 付箋、マスキングテープなどを活用
・ひらき出した意見の中で、1番言いたいことを決める → その他もひらき出す
(2時間目)
・班の中で2人2人にわかれ、お互いの考えを伝え、内容を考える → 内容を考える → 決める
↓
・4時間目までの1人の案を参考に、お互いの案を参考に → 70分発表をする
(3時間目)
・班で協力して内容を検討し、決める → 2時間目の70分を
・どの班に出かけたい班は3の時間内にはらき出すことも良い
しかし、4時間目の70分発表は間にあわない → 連絡も可

(4時間目)	・(全員(各班2人ほど))で70分発表会をする(50分中50分はおわらせる)
→ 残りの15分間、他の班の発表を見ての感想や自分の今の提案はどのくらい足りたのかを考える。	
(5時間目)	・4時間目の70分発表を元に戻して改善点や思っていた所を直す
→ 70分発表をキックオフより良いものをつくりあがっていく。	
(6時間目)	・発表をする
(全体として)	・班とは主に生活班とする(男42人、女の41人)
・発表方法は自由とする(制作ボード、紙、iPad...)	
(良い点として)	・4時間目には70分発表を設けることにより、時間配分を自分たちで考えることになり、相手の発表を聞いて自分たちはどのようになっているかを理解することになり、かつお互いにより良いものを作ることにできる。
・アイデアをひらき出すことにより、「これはいいね!」「これは実現可能...?」などと言われたりすることになる。	

※ここへは記入しないでください			
情	/2	情報収集	
		情報整理	
代	/3	思考拡散	
		比較検討	
		思考収束	
企	/2	目標設定	
		手段構築	
主	/3	渉外調整	
		準備試行	
		役割遂行	
ユ ニ テ	/4	相互理解	
		即応思考	
		情報運用	
		礼儀作法	
ユ ラ	/2	協働創造	
		互惠行動	
合計		/16	







# 補 足 資 料 3

生徒アンケート（7月，12月）

No.	質問内容	1年生				2年生				3年生				全校			
		平均（5点中）			検定	平均（5点中）			検定	平均（5点中）			検定	平均（5点中）			検定
		7月	12月	比較差		7月	12月	比較差		7月	12月	比較差		7月	12月	比較差	
1	グローバル人材育成科の活動で、「情報統合力」「代替思考力」といった様々なアビリティが高まってきたと感じる。	4.10	4.24	0.14	*	4.04	3.91	-0.13	+	3.77	3.92	0.15	+	3.97	4.02	0.05	
2	グローバル人材育成科で学んだ内容や高めたアビリティは、これからの社会をよりよくするために必要なことだと感じる。	4.60	4.54	-0.06		4.61	4.43	-0.18	*	4.28	4.41	0.13		4.50	4.46	-0.04	
3	グローバル人材育成科で学んだ内容や高めたアビリティは、将来自分の人生を生きていく上で大切なことだと感じる。	4.54	4.62	0.08		4.54	4.47	-0.07		4.24	4.32	0.08		4.44	4.47	0.03	
4	グローバル人材育成科の学習へ、意欲的に取り組んでいる。	4.41	4.50	0.10		4.36	4.20	-0.16	*	4.19	4.30	0.11		4.32	4.33	0.01	
5	課題に応じて、必要な情報を集めることができる。	4.15	4.34	0.19	*	4.23	4.14	-0.09		4.25	4.23	-0.03		4.21	4.24	0.02	
6	集めた情報を、整理することができる。	4.06	4.24	0.19	*	4.12	4.16	0.04		4.22	4.26	0.04		4.13	4.22	0.09	
7	課題について話し合うときに、自ら新しいアイデアを出すことができる。	4.06	4.24	0.18	*	4.01	4.12	0.11		4.08	4.08	-0.01		4.05	4.15	0.10	
8	課題について話し合うときに、視点を決めてアイデアを比較することができる。	3.90	4.02	0.11		4.04	4.04	0.00		4.00	4.13	0.13		3.98	4.06	0.08	
9	課題について話し合うときに、多くのアイデアを統合して1つにまとめることができる。	3.81	4.00	0.19	+	3.93	3.97	0.03		4.08	4.12	0.04		3.94	4.03	0.09	
10	活動を進める前に、活動のゴールを思い描くことができる。	3.81	3.95	0.14		3.81	3.91	0.10		3.87	3.93	0.07		3.83	3.93	0.10	
11	活動を進める前に、自分たちで役割分担や今後の予定を考えることができる。	4.11	4.20	0.08		4.23	4.16	-0.07		4.09	4.11	0.02		4.15	4.16	0.01	
12	活動を進める際に、協力してほしい外部の人と、活動や予定を調整することができる。	3.95	4.33	0.37	**	4.02	3.90	-0.12		3.97	4.09	0.13		3.98	4.11	0.13	
13	実際に活動を進める前に、自分たちでリハーサルや試行をすることができる。	4.02	4.05	0.02		3.98	3.93	-0.04		4.13	4.27	0.14	+	4.04	4.08	0.04	
14	活動を進める際に、進んで自らの役割を行うことができる。	4.41	4.52	0.11		4.39	4.30	-0.09		4.36	4.43	0.08		4.39	4.42	0.03	
15	課題に取り組むときに、一緒に活動する仲間を共感的に聞き、考えや立場を理解することができる。	4.43	4.28	-0.15		4.23	4.28	0.05		4.37	4.48	0.11		4.34	4.35	0.00	
16	発表を行うときに、相手の様子に応じて発表内容を変えたり、相手の質問にすぐにその場で答えたりすることができる。	3.90	3.94	0.03		3.67	3.72	0.05		3.73	3.81	0.08		3.77	3.82	0.05	
17	発表を行うときに、情報機器を使いこなしてよりよい発表を作ることができる。	3.98	4.22	0.24	*	3.93	3.75	-0.17	+	3.84	3.98	0.13		3.92	3.98	0.07	
18	活動に取り組むときに、その場にふさわしい言葉遣いをしたり、行動をしたりすることができる。	4.34	4.49	0.15	+	4.38	4.26	-0.11		4.33	4.33	0.01		4.35	4.36	0.01	
19	同じ課題を追究する仲間以外とも関わって、これまでにない新しいものを創り出すことができる。	4.00	3.99	-0.01		3.90	3.83	-0.07		3.91	4.19	0.28	**	3.94	4.00	0.07	
20	同じ課題を追究する仲間以外とも関わって、互いにメリットのある良好な関係を築き、活動をすることができる。	4.23	4.26	0.03		4.17	4.07	-0.10		4.09	4.28	0.19	*	4.16	4.21	0.04	
全体平均		4.14	4.25	0.11	*	4.13	4.08	-0.05	*	4.09	4.18	0.09		4.12	4.17	0.05	

# 補 足 資 料 4

# 保護者アンケート（12月）

No	質問内容	否定的 ←			→ 肯定的		肯定的評価 の割合 ④+⑤
		①はっきり イエ	②イエ	③どちらと もいえない	④ハイ	⑤はっきり ハイ	
1	各教科の学習に加え、「情報統合力」「代替思考力」のように、これからの社会で求められる資質・能力を育成することは大切だと思う。	0.0%	0.8%	5.0%	<b>27.7%</b>	<b>66.5%</b>	94.2%
2	これからの社会で求められている資質・能力を育成する「グローバル人材育成科」のような教科は必要だと思う。	1.7%	0.6%	9.5%	<b>34.6%</b>	<b>53.6%</b>	88.2%
3	子供たちの学力や資質・能力の育成のために、これまでの教育課程と比べ、年間授業時数を増やしたことはよいと考える。	0.3%	1.1%	12.3%	<b>32.4%</b>	<b>53.9%</b>	86.3%
4	お子様は、新聞や本、ウェブサイト等を利用して知りたいことを調べている。	1.4%	2.5%	12.8%	<b>40.8%</b>	<b>42.5%</b>	83.3%
5	お子様は、1つの情報だけを鵜呑みにせず、複数の情報を比べることができる。	1.1%	6.4%	36.0%	<b>39.9%</b>	<b>16.5%</b>	56.4%
6	お子様は、家族で行動するときは、いくつかの方法を提案するなど、発想力が豊かである。	5.0%	10.9%	35.8%	<b>33.5%</b>	<b>14.8%</b>	48.3%
7	お子様は、学習やスポーツなど、様々な活動に目標をもって取り組んでいる。	3.9%	8.1%	21.2%	<b>38.0%</b>	<b>28.8%</b>	66.8%
8	お子様は、物事に取り組む際は、計画を立て、見通しをもって行動している。	7.0%	17.9%	29.1%	<b>31.8%</b>	<b>14.2%</b>	46.1%
9	お子様は、家庭での自らの役割に、進んで取り組んでいる。	7.5%	18.2%	30.4%	<b>31.3%</b>	<b>12.3%</b>	43.7%
10	お子様は、自分の考えを分かりやすくまとめて、伝えることができる。	3.1%	15.1%	28.5%	<b>37.7%</b>	<b>15.6%</b>	53.3%
11	お子様は、相手や場を意識して、適切な言葉遣いで伝えることができる。	1.1%	3.9%	21.5%	<b>46.9%</b>	<b>26.5%</b>	73.4%
12	お子様は、積極的に地域の方と関わるなど、家族以外の人の役に立っている。	9.5%	17.9%	39.1%	<b>26.3%</b>	<b>7.3%</b>	33.6%
13	お子様は、身近な地域や世界で問題になっていることについて興味があり、話題にすることがある。	3.6%	5.9%	22.1%	<b>44.7%</b>	<b>23.5%</b>	68.2%

# 補 足 資 料 5

## 4 ルーブリックを活用した評価

### (1) 考察

- ・ A目標で満足せずに、より高次のS目標を設定することで、ステージ全体の学びの内容や向上を目指す『スキル』への関心が深まっている様子が見られた。
- ・ 「より高次」という幅の広い文言が生徒の発想の自由度を高めていた反面、そこに気付かずに単純に量的な面を増やすだけ、という生徒も見られた。
- ・ S目標の内容は「いつでも、何度でも追加・修正してもよい」としていたが、逆にそのタイミングがつかめずに困惑している生徒も見られた。
- ・ 実践を進めながら、生徒の中で自分なりの「よりよい目標設定の方法」が定まっていくように見えた。特に3年生ではその傾向がはっきりと見られた。

### (2) 次年度への検討事項

- ・ S目標の設定については、他者と文言やその意図を共有することで、より内容の高まりが期待できる。また、複数年の実践を重ねることでモデルの蓄積や提示も可能にはなるが、生徒の創意工夫の意欲が低下しないように配慮しなくてはならない。
- ・ 学習活動の内容にもよるが、最低でも週に1回は自分のS目標を確認し、必要に応じて見直しをするように呼びかけを行う。
- ・ 次年度は、デジタルポートフォリオとの併用がしやすいように、デジタルで書き込みを行ったり、複数ファイルを追加・更新したりしながら、運用を進める。

